

東京パラリンピックへ向けて 講道館で柔道大会

柔道の総本山・講道館7階、420畳の大道場。広い窓からは冬の弱い日の光だけでなく、冷気も深々と沁み込んでくる。だが、柔道姿勢の選手たちは、もちろん裸足だ。重量感のある足音が、畳を伝ってくる。気合の入った掛け声がぶつかり合い、吹き抜けになった上階の観客席から歓声が沸く。床面のスプリングに大きな振動が伝わるとともに、主審が「一本！」と告げる声が響く――。

第33回全日本視覚障害者柔道大会（主催・NPO法人日本視覚障害者柔道連盟）が、2018年12月23日、東京・文京区の講道館で開催され、約50人が参加、日ごろの鍛錬の成果を発揮した。

（本誌）

精力善用・自他共栄

今日の「柔道」は一般に、様々な流派の「柔術」を学んだ嘉納治五郎が、1882（明治15）年に体系化し、「講道館柔道」と名付けたものだ。「精力善用」を原理、「自他共栄」を目的とし、それらによって自己完成を目指す「道」と捉えられている。世界中に競技者がいて、多くの言語で「Judo」という単語が使われているという。

視覚障害者の柔道は、1955（昭和30）年ころから、盲学校を中心に行なわれてきたといわれているが、講道館誌『柔道』に、1943（昭和18）年には「盲人と柔道」という記事、翌年には「盲人流汗――失明者の柔道修行記」という東京盲学校師範部（現

在の筑波大学理療科教員養成施設) 3年生だった鷲野武の連載記事も掲載されている。

1986(昭和61)年に日本視覚障害者柔道連盟が設立され、第1回全国大会が、やはり講道館で開催されている。



そのような歴史のある視覚障害者柔道だが、今回の大会は、例年とは少し雰囲気違ったらしい。

開会式の挨拶で、日本視覚障害者柔道連盟の竹下義樹会長(=日本盲人会連合会長)もいうように、会場には、間近に迫った東京パラリンピックに向け、期待と緊張感が漂っている。竹下さんは、「全国の皆さんが期待している、この視覚障害者柔道大会は、2020年のパラリンピックに向けて、日本の柔道を世界に示す第一歩」とし、「日ごろの練習の成果を発揮するとともに、自分たちの力をさらに高めるモチベーションを持ち続けることも願う」と述べた。

ここ数年は、外国人選手の参加も受け入れてきたが、今回は原点に戻る意味で参加は日本人のみ。その代わり3月には、東京国際大会を開催し、外国人選手も招へいする予定だ。

組み合って試合開始

競技は、障害の程度による区分ではなく、体重別で行なわれる。試合規定は、国内・国際大会とも、すべて国際柔道連盟(IJF)試合審判規定、国際視覚障害者スポーツ協会(IBSA)の柔道試合規則及び大会申し合わせ事項による。